



「青い鳥」



明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いします。

さて、みなさんはどんな時に幸福だと感じるでしょうか。何か目標が達成された時、あるいは目標に向かって必死になっている時でしょうか。それが勉強でも、仕事でも、スポーツでも、趣味でもかまいません。人が幸福に酔いしれるのは、人間誰にでもある基本的な権利ではないでしょうか。幸福に生きることは、人に限らず、この世で生きる者たちの究極^{きゆうきよく}の目標のように思えるのです。

かつて、テレビのドキュメンタリー番組で、ホッキョクグマの生態を追っていた番組がありました。その一シーンに、白クマの母親が、じゃれついてくる子グマたちを、面倒くさそうに払いのけるような仕草^{しぐさ}のカットがありました。母グマも小グマも笑いのような表情に浮かべ、広々とした北極の雪の大地の中での幸福が、ありありとクローズアップされていました。きっと、これが幸福なんだと、食い入るように画面を見つめていたことを覚えています。

ベルギーの詩人メーテルリンクの童話劇の『青い鳥』では、幼い兄妹チルチル、ミチルが、幸福の象徴である青い鳥を探しに出かけます。過去の国、未来の国、夜の国などをあちこち旅するのですが、見つからず、家に戻ってみると、家の鳥かごの中に青い鳥を見つけた、という話でした。メーテルリンクは、幸福は探しに行っても見つけられるものではなく、平凡な日常生活の中にあるとでも言いたいのでしょうか。

一方、フランスの哲学者アランは、その著『幸福論』の中で、

…仕事を規則正しくすること、そして、さらなる困難をも乗り越えること、これがおそらく幸福に至る正道である。

…幸福になろうと欲しなければ、絶対幸福になれない。……したがって、自分の幸福を欲しなければならない。

自分の幸福をつくり出さなければならない。

…人間が幸福であるといえるのは、何かを欲する時と、つくり出す時だけである。

などと、幸福に関する自説を展開しています。いささか極論のようにも思えますが、一理あるとも思います。

アランは、幸福はそれを求め行くことが大事で、それが生きることであり、働くことであると言っているかのようです。ただ単に願っているだけではだめで、言わばアクションを起こすこと、それがメーテルリンクの言う、自分の家の鳥かごの中の青い鳥であったとしても、結果として、幸福を手に入れたことになるのではないのでしょうか。

青い鳥は、それを手に入れる努力をした人の肩に、さり気なくとまっているのではないのでしょうか。